

2010

9

目次
CONTENTS

- | | | | |
|---|-----------------------|----|-----------------|
| 2 | 災害への備えは万全ですか？ | 10 | 那珂市消費生活センターです |
| 4 | 公共交通を利用しましょう | 11 | 救急医療ご利用にあたって |
| 6 | 歴史民俗資料館だより 水鳥 | 12 | まちの話題 |
| 8 | 菅谷まつり | 14 | Information |
| 9 | 協働のまちづくり
環境ミニトピックス | 18 | さわやかさん、表紙の裏側 ほか |



猛暑を吹き飛ばすまつりの熱気（菅谷まつり）

水鳥

12

特別企画展 看板・レッテル展

「酒と醤油と名水と」

◆期間 10月30日(土)～12月12日(日)

・酒のいつ・

明治初期の酒造業は諸産業の中で大きな比重を占め、那珂郡の場合酒造額では製茶産出額の5倍強、葉たばこの17倍強、醤油の7倍でした。

那珂市域は台地内にあるだけに深井戸や湧水も豊富です。そのために酒や醤油などの醸造業が古くから起こりました。それに伴い、稲作や林業の振興が図られ、流通のための運送業や販売業も多くなつていくわけです。菅谷の小宅家や中里の住谷家などは酒販売店の一例です。



◆上：住谷商店（住谷登志男氏提供）

◆下：酒德利（小宅近昭氏提供）



『常陸風土記』には「久慈の味酒を飲む」とあります。酒出村は当時久慈郡に属しておりその名の通り酒造りが行われていたとされています。江戸時代の酒造業の初めは、城下町の米穀商人が主でしたが次第に地方の有力者に移っていきます。享和元年（1801）では表に見るように本米崎（2）・額田（5）・菅谷（4）・後台（1）・下江戸（1）・戸村（1）・鴻巣（2）・門部（3）・瓜連（4）の各村で行われていました（数字は軒数）。酒造業者は江戸時代後半にはかなり増加しましたが、醸造の未熟さや経営能力の問題などからその多くが姿を消していつています。「磯辺村次郎兵衛より」とか「潮来村又吉へ譲る」とかあるように「酒造株」の売買が行われたのでした。

享和元年（1801）水戸領酒造人改書上

村名	造株高	酒造米高	氏名	備考
本米崎	320石	300石	善左衛門	本米崎村清次郎分
本米崎	40石	40石	吉左衛門	
額田	45石	35石	久治郎	
額田	30石	25石	五郎衛門	
額田	53石	51石	吉六	久慈郡下土木内村市兵衛より
額田	100石	100石	彦三郎	久慈郡磯部村次郎兵衛より
菅谷	280石	270石	横須賀喜内	
菅谷	44石	30石	甚衛門	
菅谷	50石	45石	善十	
菅谷	35石	30石	善衛門	
下江戸	50石	45石	庄衛門	
戸村	50石	40石	吉郎衛門	
鴻巣	100石	100石	久兵衛	
鴻巣	25石	25石	義兵衛	
門部	52石	45石	太左衛門	
門部	62石	60石	弥一兵衛	
門部	61石	55石	茂平治	
瓜連	415石	380石	新右衛門	
瓜連	193石	180石	左一兵衛	嘉一衛門跡
瓜連	40石	38石	平衛門	
額田	40石	30石	権兵衛	磯部村重郎兵衛へ譲る
瓜連	278石	270石	五郎兵衛	小沢村太郎衛門へ譲る
後台	40石	25石	清蔵	潮来村又吉へ譲る

（「茨城県史料」社会経済編Ⅳより作成）

『那珂町史』によれば、幕末から明治にかけて少なくとも36軒の酒造家がありました。明治34年（1901）にはわずか5軒に減少しています。額田北郷の寺門家（竜門）、宮崎家（宮盛）、鴻巣の宮本家（菊盛）、額田東郷の関家（常陸灘）、菅谷の根本家（焼酎醸造）がそれらです。そのほか、門部村の庄司家や小泉家・古谷家、瓜連の相田家（相生正宗）や大橋家（相生大盛）も酒造業を営んでいました。

■講演会のご案内■

展示講演会 「藤田東湖と酒」

日時 11月28日(日)
9:30～11:30

会場 中央公民館

講師 歴史民俗資料館長 仲田昭一
学芸員 外山敬一

参加費 無料

定員 60人

申込先 歴史民俗資料館 ☎297-0080

・醤油のいじり・

徳川光圀が編さんした『救民妙薬』の中に、水戸領を離れて他藩へ行く場合は水あたりを防ぐために「タニシを醤油で炒り付け、よく干したものを所持すべし」とありますから、醤油は元禄時代には造られていたことがわかります。関東各地で盛んになるのは江戸時代中期以降のようです。特に土浦地方は、周辺の村々から品質のよい大豆や小麦が生産され、原料や製品の輸送に霞ヶ浦の舟運が適していたこともあって早くから醤油の醸造が発達しました。醤油造商大黒屋のマークが亀甲の内に大を書く「亀甲大」が有名で、商標「キッコーナオ」もこれに関連しているかと想像されます。那珂市域でも西木倉村山田家や鴻巣村宮本家、下江戸村秋山家、古徳村の岩上家などで醤油の醸造が行われていました。



◆山田醤油レッテル (山田正氏提供)



・名水のいじり・

日立市泉が森泉神社の見事な湧水には及ばないものの、那珂市域にも多くの名水があります。「酒出」の語源でもある酒のような美味^{うまさ}水が出る湧水は藪を脱けて流れ出ています。額田東郷の永井不動尊脇の崖下からは名水の滝が、西木倉の瀧龍不動明王には新鮮豊富な湧水池があります。水戸市上国井字滝上の三国澤は徳川光圀もその美景を愛でていますが、その坂は軍民坂と呼ばれています。その坂の途中に名水が流れ出ています。下大賀瀧神社に近い滝沢、この岩崎堰沿の名水は流出量も多く魅力あるものです。八幡太郎義家に関連した鹿島の化粧坂の途中にも名水が出ています。



◆上：軍民坂名水

◆右：下大賀滝沢湧水

◆下：堤弁財天池



また、弁財天(厳島神社)は水をつかさどるインドの神とされているだけに、どこでも池を持っています。東木倉清水寺境内の弁財天池や堤静神社西方の弁財天池は大きく豊かな水量です。弘願寺の弁財天池や静神社の神泉池も注目されるところです。

・藤田東湖と酒・



◆藤田東湖 (『東湖全集』)

東木倉出身の根本正代議士が生涯の指針とした「義公壁書」(光圀の教え)の中に「慾と色と酒とを敵と知るべし」とあります。しかし光圀は酒をこよなく愛し「酒に飲まれるな、酒の勢いを以て意見をする者は勇氣のない者である」と教えています。義公を崇敬した藤田東湖(飯田中島が先祖の地)も酒を好み、墨田川にちなんだ銘酒「墨水春」や上方の銘酒「剣菱」はその名称に惹かれて愛用したようです。「酒を貪る人は酒を愛する人に非ず」、「酒はもって氣力を養う」、「読書は飲酒の如し、至味は会意にあり」などの名言から、東湖の酒飲みの姿が浮かんできます。一方、東湖の子健次郎の世話を受けた根本正は「東木倉村全体が禁酒村になることを期待している」旨の手紙を郷里に送っています。それぞれに、酒にはさまざまな思いがあるものです。